



環境に目を向けて

今年も、地域の方々やJAの方々にご支援をいただき、5年生はバケツ苗の栽培を行いました。先日、無事に収穫を終えたところでした。(その様子は、ホームページにも掲載しています。ぜひご覧ください。)

無事に、とは書きましたが、今回は決して大豊作とはいかなかったようです。実は、今年度のコメの収穫は、全国的にあまり振るわなかったとのこと。関連して、キャベツやレタスなどの野菜の収穫も、非常に厳しい状況にあるという。あの大好きなトマトが、3個パックで600円！驚きの値段に、今の不作が表れているといえます。

これは、由々しき問題です。

環境問題が叫ばれ始めて、もうずいぶん経ちます。そういえば、地球温暖化は私が教師になった30年以上前の社会科資料集にも掲載されていました。国連のアントニオ・グテーレス事務総長が「さらに地球は沸騰化の時代に入った」と述べたことは、非常に衝撃的でした。

それほど、地球の環境は危機的状況にある。

一概に原因はこれだと決められないと思いますが、我々人間の生活がこの環境の急激な変化を誘発しているのは間違えなさそうです。だから、我々がどうにかしないとイケない。

そんなことを考えていたところ、大林宣彦監督のあるインタビュー番組と出会いました。大林監督は、「時をかける少女」(東映配給、筒井康隆原作、原田知世主演、1983年)など、斬新な映像表現で私たちのエンターテインメントを支えてくださった方です。その大林監督、がんを患い余命宣告を受けていることを明らかにしています。大林監督は、その闘病生活で、ある一つのことに気づいたと、次のようにおっしゃいました。

「がん細胞は私の体に入り、私と共存しているにもかかわらず、私の体をいじめる。もし、私が亡くなったらがん細胞もなくなってしまうのに。だから、ほどほどにしておきなさい、ってがん細胞には言っているんですよ」

さらに、話は地球環境問題に広がっていきます。

「地球にとって人間も同じかもしれない。人間が好き勝手し放題にしてしまうと、地球は弱ってしまう。地球が亡くなったら人間も亡くなるのにね」

私は、この深い洞察に言葉を失ってしまいました。

大林監督の言葉を、どのように受け止めればよいのでしょうか。地球環境は、非常にゆっくりとしたスピードで変化するものだから、人の目にはその変化が見えにくい。しかし、子どもたちを取り巻く環境は、私たち大人が過ごした環境とはずいぶん違うものです。そう、この環境問題を解決できる人は、今日の前にいる子どもたちなのですが、その問題に気づき、自覚し、提起する大きな役目を担っているのは、私たち大人なのかもしれません。だから、楡木小学校も環境問題から目をそらさず、子どもたちとともに様々な取り組みを行っていくと思っています。できることから、一つ一つ。